



編集・発行 邑楽町役場企画課  
〒370-0692 (住所記入不要)  
☎ 0276-88-5111 (代表)  
☎ 0276-47-5007 (企画課直通)  
☎ 0276-89-0136  
URL <http://www.town.ora.gunma.jp>  
E-mail [koho@town.ora.gunma.jp](mailto:koho@town.ora.gunma.jp)

邑楽町携帯サイト  
2次元コード対応の携帯電話は、右のコードをご利用ください。読み取りができない場合はURLをご入力ください。  
携帯用URL <http://www.town.ora.gunma.jp/k>



〈第四十八回〉

若い人たちに語り継ぎたい、  
次の世代に残しておきたい。  
貴重な話をお届けしますー。

## あすへひとこと

いつの時代までも残したい

### 邑楽町の昔ばなし

おひな様と遊んでいきたいのですが、おばあさんがお母さんに「節句が済んだら、早くしまわないと、娘が大きくなっても縁遠い」と言っているのを子どもたちは聞いていました。せっかくなので、もっと遊んでいたいのにおばあさんが、お母さんにしまいのを急がせたものです。やがて歳月が過ぎ、女の子が成長して娘になるころには、おひな様もなかなか飾ってもらえず、いつもしまわれたままになっていることが多かったようです。こうなりますと、せっかくなのおひな様が本当にかわいそうですが、大人たちは、



イラストは、広報おうら1月号「成人式典」で取材した伊藤彩夏さん(開拓・32区)。アニメーターを目指して学業に励んでいます

### おひな様

かやぶきの家の軒下に垂れ下がったツララもいつのまにか姿を消し、早春の息吹を感じるころ、女の子のいる家ではどこの家でもおひな様が飾られます。

子どもたちは一年間、箱の中に眠っていたおひな様との対面を待ちこがれたものです。段を覆った赤いじゅうたんの上に並んだその姿は春を感じさせます。

今から75年も前のおひな様は質素な人形が多かったのです。それでも親たちは、娘の幸せを願って飾ってくれました。

そして3月3日のお節句には、草餅やあられ餅などを供えてお祝いしました。子どもたちはいつまでも、いつまでも

「おひな様を箱に入れてしまっておくと、娘たちが嫁にいけない。おひな様を川に流せば粗末にならず清められ、浮かばれ、娘たちの身代わりになり、娘たちには幸福をもたらす」と思っていたようです。子どもたちは親の言いつけで、おひな様を川に流しにいきました。おひな様が、だんだん川の水に浸り、衣の赤い色が水ににじみできて、沈みながら、ゆるやかに流れていく様子を、子どもたちはいつまでも、いつまでも見守っていたのです。今では、この流しひなの風習はありませんが、そのころの子どもたちは、あれから75年を過ぎても、自分たちのあのころの様子が焼きついていて、それを思うと懐かしさに駆られるといえます。



現在、一般的なひな人形は関東雛といわれ、向かって左にお殿様が座っています。昔は逆で、向かって右にお殿様が座っていました。現在も京雛として残っています

【発行】邑楽町老人クラブ連合会 【編集】あすへひとこと編集委員会  
平成10年12月31日発行「高齢者の語り(第六集)あすへひとこと」より



白鳥のダンス  
(多々良沼)



Photo 高根澤高明(記録ボランティア)

### ひとりごと From editors

▶白鳥たちが北へ旅立つ準備を始める季節となりました。シンボルトワーの周りを飛びながら鳴く彼らを見られなくなってしまうのは寂しいですが、無事目的地へ到着することを祈っています。去る者がいる一方で庭先を見ると、福寿草がほころんでいました。春と共にさまざまな訪れがありそう、今から楽しみです。▶この時期は空気が澄んでいて、役場の2階からは富士山が見られます。黄昏時になるとシルエットが夕焼けに映えてとてもきれいです。▶黄昏時という言葉は、薄暗くなり、人の見分けがつきにくく「誰ぞ彼は」と問うことが語源であるそうです。そんな夕暮れ時に、誰に問わずともはつきりわかる富士山は、邑楽町におけるシンボルトワーのようです。(栗原)



この広報誌は、自然保護のため植物油インキを使用しています。



この広報誌は、東日本大震災で被災した三菱製紙のニューVマット紙を使用しています。